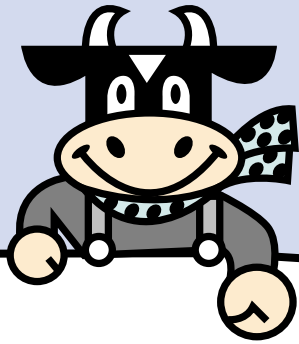




ワンポイント・アドバイス



体細胞数について

今回は、日常往診の合間に農家の方から受ける体細胞数についての疑問のいくつかにについてお答えしようと思います。

《乳房炎ではないけど体細胞数が高くて困ってんだけど》

体細胞数が高いと言ったことは乳房炎です。乳頭口からばい菌がはいって、そのばい菌をやっつけるためにやってきた白血球と、炎症がおきて剥げ落ちた乳腺の内皮が体細胞です。体細胞数が増加することは、乳腺内に炎症が起こっているシグナルです。われわれは、熱があったり、しこりがあったり、ぶつがでる牛を乳房炎の牛として治療していますが、実はそのような症

状をださない乳房炎のほうが多いのです。

《抗生物質でない体細胞数を下げるとなにかいい薬ないかい》

ありません。体細胞数が高い牛は乳房炎です。早期発見、早期治療がいちばんの近道です。炎症ですから早期に治療しないと慢性化します。慢性化すると、乳腺組織の繊維化、萎縮、瘢痕化、血行障害、免疫力の低下などの合併症をおこします。そうなるとう治療費も高くなりますし、治療期間も長くなります。生産に直結する牛の病気のなかで乳房炎こそ早期に治療しなければならぬ病気なのです。

《体細胞数が高いので、乳汁検査したが菌マイナスと言われた》

乳房炎で細菌検査しても細菌が検出しないときがあります。乳頭口から進入したばい菌がすでに白血球にたべられて死滅してしまっただけです。黄色ブドウ球菌のように乳腺組織の深部にひそんでいて、採取したときの乳汁にたまたまはいっていなかったなどの理由が考えられます。しかしいずれにせよ乳房内に細菌感染があったことには変わりありません。ひき続いて体細胞数が高く推移するのであれば、放置せず治療すべきです。

《体細胞数を下げるため黄色ブドウ球菌保菌牛を淘汰すべきか》

黄色ブドウ球菌性乳房炎は治りにくく、また搾乳時に他の牛に感染を起こす危険性があるため、セオリーから行けば淘汰や盲乳化がのぞましいと言えます。しかし黄色ブドウ球菌性乳房炎対策を難しくしているもう一つの原因として、1回の乳汁検査では摘発が難しいことがあげられます。黄色ブドウ球菌は乳腺組織の深く奥に住みついたために、なかなか乳汁中に出てこないのです。つまり乳汁検査ですべてなくなっても、保菌している可能性があるということなのです。ですから黄色ブドウ球菌感染牛を淘汰するのか、治療するのか、放置するのか、早期乾乳にするのかは、保菌牛の状態と数、農家の現状によって変わってくるのです。黄色ブドウ球菌の他の牛への感染は搾乳中に起こります。ですから最も効果的な黄色ブ

ドウ球菌対策は、いかに健康な牛を守る搾乳をするか。あるいはいかに乳頭口を痛めない搾乳をするかにつきますのです。

《体細胞の高い牛だけ乾乳軟膏をさせばいいのかい》

乾乳軟膏は全頭に注入してください。乾乳軟膏は現在かかっている乳房炎を治療する目的だけでなく、もうひとつ重要な目的、健康な牛を乳房炎から守るといふ目的があります。乾乳直後2週間は乳房炎に最もかかりやすい時期です。泌乳期の20倍感染の危険性があります。健康な牛こそ乾乳軟膏をいれるべきなのです。

《体細胞数をさげる色々な商品のためにしているのですが》

カニの甲羅やホタテの貝殻からとれた粉、えたいの知れない茸から取れたエキスだとか、使用すれば体細胞が劇的にさ

がるというて売られている商品が氾濫しています。まったく効果が無いとは言いません。しかしこれらは小手先の技であって、本質的な問題の解決にはならないのです。牛群の体細胞数が高くなる原因は「搾乳時に乳頭口からばい菌が入ること」なのです。ですから、乳頭口を痛めない搾乳をどうしたらできるのか。どうやったら乳頭内にはばい菌の入らない搾乳ができるのかに正面から向き合わないと、なんの解決にもならないのです。「体細胞数対策は乳房炎防除対策である」という認識をもって、はじめて乳質改善がスタートするのです。